

汚いアメリカ

—「自由と正義の国」の実態—

山口光朔

いうまでもなく今日のアメリカにかんしてもっとも話題となる事件は、いわゆる「ウォーターゲート事件」であります。この事件こそは、まさしくアメリカ史上最大の政治的スキャンダルであります。だがそれはまた、アメリカ史上最大の荒廃のあらわれでもあります。大統領と事件との関係が問題にされる以上に、すでに副大統領が汚職で引責辞職したなどということは、合衆国はじまって以来の珍事でもあるわけです。

アメリカの最近の変化は、これだけにとどまりません。ステューデント・パワー、ホモ、マリファナ、LSD、ウーマン・リブ、ヒッピー、イッピー、ジッピー、都市犯罪の激増……などという現象は、かつてのハリウッド映画はなやかなりしいわゆる「なつかしいよき時代」のアメリカを知る人びとにとっては、まさに「オドロキ」以外の何物でもありません。

じつはそういう変化は、いずれも一九六四年以後に起こっている。もっと具体的には、ベトナム戦争が本格化した一九六五年以後であります。すなわち、アメリカはベトナム戦争を契機として、今日の荒廃に見まわれたといっても過言ではない。過去においてもいろいろな病

根をもち、「病めるアメリカ」と称されてきたアメリカではあったが、今日のアメリカはもはや「病めるアメリカ」どころかまさしく「汚いアメリカ」といふべき状況にあります。さらにそのアメリカは、「汚いアメリカ」とおとりこして、「狂ったアメリカ」ないし「狂気のアメリカ」とでもいふべき現状を呈しているといっても過言ではありません。 「ウォーターゲート事件」こそはその代表例にほかなりませんが、そういうアメリカの現実を、過去数回にわたる訪米のさいの見聞を加味しつつ、考えてみたいと思います。

アメリカの神話の崩壊

たしかに現在のアメリカの代名詞は「狂ったアメリカ」ないし「汚いアメリカ」ではあるが、かつては「自由と正義の国」というのがアメリカの代名詞のひとつであったことも事実であります。そのほかに「豊かな社会」であるとか「常勝不敗の強大国」というのもアメリカの代名詞でありました。ところが、率直に言って、最近ではこれらの代名詞の影がうすれたというか、昔のアメリカのよき面影はまったく

なくなってしまったというのが、アメリカの現実であるといえます。アメリカに関するこれまでの神話がもろくも崩れ去った。それを示す一例としては、よく「夜一人で歩く時は警戒しろ」といわれることだ。これは何を意味するかというと、都市犯罪が非常に激増していることです。ニューヨークの知人の家では、入口の鍵が四つもつけてあった。それでもまだ安心できなくて、内側から鉄棒の支えを置いてあるといった状況である。こういうことが、今日のアメリカの荒廃ぶりを如実に示しているように思われる。このような現象があらわれてきたのは一体何時ごろからかというところ、けっしてベトナム戦争と無関係でないとはっきりいえると思う。とくに一九六五年以後、この年の二月に北爆が開始され、五月に米軍の直接介入が行なわれて以後、アメリカの腐敗・荒廃が著しくなったといえる。二、三年前までは、ニューヨークあたりの東部の大都会で犯罪が激増していたのが、最近ではサンフランシスコあたりにもそういう危険性が出てきた。こういった現象があると同時に、他方ではこの講演の題名の「汚いアメリカ」のように、じつに不明朗で汚い事件が、とくに一九六八年にニクソンが大統領になって以来、続発している。

例えば、一九六九年の秋から七〇年の二月にかけて行なわれたいわゆる「シカゴ・エイト裁判」というのがあります。これは、一九六八年のシカゴにおける民主党全国大会の際の暴動事件にかんして、それを指導したと思われる人びと八人が起訴されて裁判になった事件であります。結果においては、だれも事件については罰せられなかったわけです。これは完全な「デッチアゲ」事件だといわれている。それにつづく大きな事件は、日本においてはあまり報道されませんでした。一九七一年の「ハリスバーグ・シックス事件」がある。これにかんしては、じつは主謀者と目されたのが、ベリガンというカトリックの神父で、ダニエル・ベリガンとフィリップ・ベリガンの兄弟です。この神父たちは、それに先だっているいろいろな反戦活動をした。例えば、新潮社から出版された戯曲で、ダニエル・ベリガンが書き、有吉佐和子さ

んが訳した『ケイトンズビル事件の九人』の「ケイトンズビル事件」がある。このつぎに起ったのが「ハリスバーグ・シックス事件」である。じつは、当時大統領特別補佐官のキッシンジャーを誘拐してベトナム戦争を早く終結させようとした事件といわれている。ところが実際には、FBIのデッチアゲた事件であったわけです。というのも、主謀者であるはずのベリガン神父は、その当時は前の事件の「ケイトンズビル事件」でブタ箱に入っていたから、できるはずがないのである。監房の中に入っていた仲間の中の一人が、ベリガンが獄中から事件の指揮をしたと証言したが、その証人はじつはFBIの手先であることがバレて、事件はFBIのデッチアゲであることが判明した。

ウォーターゲート事件

こうした一連のデッチアゲ事件、いわゆるフレーム・アップの事件がつづいた。そういうところに、今度は一九七二年の六月に大統領選挙に関連して民主党本部の盗聴事件のウォーターゲート事件が発生してくるわけである。これらの事件の共通点は、「フレーム・アップ」されたデッチアゲないし謀略事件であるわけであるが、とりわけそれが国家権力側の謀略であるというところに特徴があると思う。とくに今回の事件は、米国史上はじめての、現職の大統領とその側近をめぐる最大規模のスキャンダルというところに特徴がある。大統領選挙でアメリカの最高権威というべき大統領職（これは「聖職」とみなされている）をめぐる醜い謀略が行なわれた。そして内容としては、殺人と強盗を除くすべての犯罪を網羅するほどの内容をもつ犯罪であるという、質と量をかねそなえた点においても史上未曾有の事件だといえる。しかもその担い手が、ニクソンが大統領就任のさいの公約である「法と秩序」の権化であるはずの司法省やCIAやFBIといったところの人たちがこの事件に関与している。この事件でよく名前が出てきたのに「プラマー」がある。一般にはこれは水道工事夫ないし鉛

管工事夫という語であるが、こういうニックネームのついたホワイトハウス直属の極秘グループが特殊な治安工作や情報収集に活躍した。

この指揮者が、ウォーターゲート事件の公聴会にでてきたハルドマンという人物である。この人たちがなにをしたかは新聞や雑誌でご存知のことと思いますが、例えばペンタゴン機密文書漏えい事件のエルズバーグ博士のかかりつけの精神分析医からカルテを盗みだして偽造しようとしたり、七二年の選挙予選のさいに、ニクソンの一番の強敵であったマスキーを脱落させるために、彼がハンフリーやジャクソン上院議員と同性愛行為があったというデッチアゲのデマをいふらしたりした。またニクソンを有利にするために対抗馬としてマクガバン候補を実現させるために民主党内で演出工作が画策された。そうした一連の事件の集大成したもの、あるいは最大規模で最悪のものが、ウォーターゲート事件にはかならない。

ウォーターゲート事件こそは、まさにアメリカ史上最大の政治スキャンダルである。ここにアメリカ帝国主義とニクソン政権の直面する体制的危機の深刻さがうかがえるというべきであろう。ここにニクソン政権の政治的危機と腐敗ぶりが露呈している。さらにアメリカの政治的・道徳的荒廃が示されていると思います。

行政権力と司法権力の癒着

元来アメリカの大統領は政治的に最高権威者・権力者とみなされており、また道徳的なシンボルと考えられてきた。これはとくにルーズベルトのニューディール以来の大統領への権限の集中とそれにもなう見せかけの国民統合という帝国主義の論理から生まれた神話でもあったわけですが。この神話が動揺し崩壊しはじめようとしていることをウォーターゲート事件が露呈したといえるでしょう。ニューディール以来の権力構造が実際にどういう内容をもつかというところ、行政執行権の肥大化、それから大統領への権限の極端な集中が見られる、さらに

国内支配の面では、行政と司法権力との癒着にともなうポナパルト的なしファシズム的といえる官僚統治形態を促進してきたことがいえる。その間にスミス法（外人登録法）、マッカーラン法（別名「国内治安法」）、共産主義者統制法の制定、非米活動委員会の活躍が相ついだ。一九五〇年代のいわゆるマッカッシー旋風がこれである。

マッカッシー旋風に先だつて一九四八年から四九年にかけてアルジェ・ヒスという政府の役人をめぐって、マッカッシーとならぶ反共の立役者として登場したのがニクソンであった。周知のように、彼は一九五二年に三九才の若さで（これはアメリカ史上二番目の若さである）副大統領になった。

こうした経過をたどつてアメリカは、実は過去においても世界支配体制強化のために国際政治の面であらざる侵略をおこなってきた。このことはテレビの「スパイ大作戦」や「スパイのライセンス」などを見てもわかると思いますが、様々の手くたを用いておこなってきた。そして、朝鮮戦争、つづいてベトナム戦争を引き起している。国内的にも謀略、デッチアゲ、さらに反体制運動への弾圧強化による治安警察国家化が、ニクソン出現によっていちだんと強化されたといえる。

行政権力と司法権力との癒着ということは、ニクソン政権出現以前でも顕著な現象であったが、それがニクソン時代になってとくにひどくなつた。まず第一に司法省の性格がそれ以前と以後で変わったことがあげられる。その特徴は、改悪・強化されて大統領の私物化する傾向がいちじるしくなつたことである。一九六九年の一月にニクソン政権発足と同時にウォーターゲート事件の責任者の一人と目されるミッチェルが司法長官に就任したが、彼が就任したことによつて司法省が社会秩序の維持とともに公民権運動などにも協力するようになつた。司法省の性格が失くなつてしまつた。かつてケネディ政権でロバート・ケネディが兄ジョン・F・ケネディの下で司法長官であつたときには、まだ司法省は、人権擁護的な性格が一面にはあつた。それが一変されて「法と秩序」の維持・回復のための法の執行機関という機能のみ

が強調されるようになった。しかもニクソン直属の私的機関という色彩が濃厚になってきた。

ミッチェルとニクソンとの関係を考えてみると、ミッチェルはニクソンの不遇の時代の個人的な親友であった。六〇年の選挙にケネディに敗北し、さらにカリフォルニア知事戦にも敗北したニクソンは、「二度とカリフォルニアにはもどらぬ」と捨て独白してニューヨークに行つた。そのニクソンをニューヨークの法律事務所パートナーとして迎えたのが、このミッチェルであった。ミッチェルの援助によって、ニクソンはペプシ・コーラ会社の弁護士になるなど、東部の財界人たちに接近する機会をあたえられた。そして一九六八年の選挙では、ミッチェルはニクソンのマネージャーになった。さらに七二年の選挙にさいしても、わざわざ司法長官を辞任してまで、ニクソンの再選全国委員長を引き受けたミッチェルである。そうしたことから、ニクソンにとってはミッチェルこそは「恩人」である。

ミッチェルの下で司法省に招かれた人々の顔ぶれをみても、その反動性は明白である。その中にウォーターゲート事件で名前があげられたクラインディーンストという人がいる。この人は、ミッチェルが辞任した後に、次官から司法長官になった人である。彼は、一九六四年の大統領選挙のさいに極右といわれるゴールドウォーター候補の運動員として活躍した前歴がある。いわゆる「アリゾナ・マフィア」と呼ばれるほど、ギャングと同様の強い結束をもっている。そのようなニックネームをつけられたグループの一員として、ゴールドウォーターの選挙演説の原稿を執筆したりしている。また司法次官就任にさいしては、ゴールドウォーターから「法と秩序」問題での最適の人材として大鼓判を押されて司法省入りをしている。

これらの司法省系のニクソンの親友だが、ウォーターゲート事件にかんしての六月のディーン前大統領法律顧問の爆弾宣言で、こんどはホワイトハウス側から「先制攻撃」をかけられて、切り捨てられるようになった。こういうことの中に、同事業のもつ凄惨な人間ドラマ

という醜悪な人間関係が示されている。それはまた、ニクソン政権の直面している危機感の深刻さとそういう危機にのぞんだニクソン自身の狼狽ぶりがあらわれている。「昔の恩人・友人・親友が今日の敵」になったわけだ。

一九七二年の大統領選挙

さらに体制的な危機の深刻さを見てみると、七二年の大統領選に具体的に露呈されている。すなわち相手の党の本部に盗聴器を仕掛けた。それだけではなく、マスクーをけおとして、マクガバンを対抗馬に選ばせるような策まで用いてニクソン政権を居直らせ、独占を中心とする統治形態の崩壊を防ごうとすること自体に深刻な体制的危機感というものがうかがえると思う。七二年の大統領選にかんしてある批評家は、「ニクソンが勝つて、アメリカは負けた」と評している。この言葉にも、現在のアメリカの危機状況、荒廃状況がよくいいあらわされているといえよう。

一見、七二年の大統領選はニクソンの大勝であったかに思える。ジャーナリズムは、それを「ランド・スライド（地すべり）的大勝」と称した。また当時の日本の新聞の論評の見出しをみますと、「変革をきらった米国民」、「急進的な変革をきらった米世論」、「草の根運動に限界—今後に残る変革の芽」、「急変拒んだ、新しい多数派」、「安定を求めた米大統領選挙」などである。だがはたしてそうであったかどうか。

たしかに五〇州内の四九州でニクソンが勝ち、マクガバンを支持したのはマサチューセッツ州一州と首府ワシントンだけであった。総計五三七八名の選挙人のうち、ニクソン側は五二二名、マクガバン側はわずか一七名であった。この数字を見ると、ニクソンの圧勝に見える。しかし実際の投票総数のニクソン支持は六一％であった。ということは、四〇％近くがニクソンの批判票であったことを意味する。この数

字は、六四年のジョンソン対ゴールドウォーターの戦いの時とほぼ同じである。それより問題なのは、投票率が一九六八年度の六一%より大きく下回り、五三・三%であったという事実である。これは一九四八年以来の最低の投票率であった。さらにマスキーに代わってニクソンに勝目のないマクガバンが候補者に仕掛けられたことが、七二年の選挙を評して「みじめな選択」、「不幸な選択」、「不毛の選択」といわしめた実際の原因である。

日本においてはマクガバンが候補になったことは高く評価され、例えば『朝日ジャーナル』の「風速計」欄などはマクガバン候補の出現を「アメリカの良心のあらわれ」とまで評していたほどだ。とするとなぜ投票率が低調であったかが問題である。この前提をなすのは、ニクソンが選ばれても、マクガバンが選ばれても大差がないという認識が一般化していたということであろう。こういうことが、真に「みじめな選択」とか「不幸な選択」とかいわれた原因ではないであろうか。

ニクソン側の陰謀で、民主党がマスキーやハンフリーに代わって、反主流のマクガバンを候補にし、さらにコナリーがニクソン陣営に走るなどして民主党に内部分裂が生じた。そしてルーズベルトのニュー・ディール以来の民主党の基盤が崩されてしまった。こうした点では、ニクソンの作戦はみごとに効を奏したわけである。マクガバンの敗北が既定の事実であったことも、「みじめな選択」と評されたゆえんである。それに加えて、日本の一部のアメリカ研究家や評論家たちの期待に反して、「変革の騎手」であるはずのマクガバンが、実際には六年のハンフリー候補よりも政治的な面では保守的であり、反動的であった。このことを知る若者たちが反旗をひるがえしたということが実態ではなからうか。その後のイーグルトン事件への失望とか、マクガバンがシカゴのギャングと仲が良いとうわさされるデイリー市長に接近したこと、あるいは中東戦争でイスラエル支持を表明していること等々が若者たちの失望した原因である。

ヤング・パワーと第三世界勢力

七二年の大統領選挙では、若者の有権者数がアメリカ史上最大の数に達し、二千五百万であった。これは投票年齢が満二〇歳から十八歳下げられ、それにともなつて、大量に若者の有権者数が増加した。その二千五百万という数字は、全有権者数の約半分に当たっている。ところが実際にはその若者の過半数が棄権した。全有権者の二三%が棄権したのである。それは、彼らはニクソン、マクガバンのいずれもともに支持しなかったことを物語っている。つまり若者たちはアメリカの現体制にソップをむいたといえるであろう。

もう一つ、アメリカの現体制に反旗をひるがえしたものとしていわゆる「第三世界グループ」があげられる。アメリカにおける「第三世界グループ」というのは「非白人グループ」のことである。これは、いわゆる「ブラック・パワー」の黒人をはじめ、「ブラウン・パワー」といわれるスペイン語系のアメリカ人（メキシコ系アメリカ人、プエルトリコ人など）、「レッド・パワー」といわれるインディアン、「イエロー・パワー」といわれる日系人や中国系人などのアジア系アメリカ人である。もっとも数字的には、これらの人びとは全人口に対してはごくわずかで、黒人は人口の約一一%、その他の人種は一%ないし二%にすぎない。だから全体を合わせてもせいぜい一二%か一三%にすぎないわけです。しかしその存在は無視できない。例えば大統領選中の動向として、いちはやく全国的に「第三世界連合」を組織した。そして早くから反戦・反体制・反権力の姿勢をとって運動をおこなった。だから当然ながら、反ニクソン・反マクガバンの旗印をかかげた。だから当然ながら、「Dump Nixon, expose McGovern! (ニクソンをやっつけてしまえ、マクガバンの本質を暴露しろ)」のスローガンで運動してきた。この人たちはどちらにも加担しないし、投票にもいってないことは明らかです。

一部の進歩的な白人は、日本でもよく読まれている育児書の著者で

あるベンジャミン・スポックという小児科の医者を大統領候補にあげて運動した。かれらは「ピープルズ・パーティー(人民党)」という党をつくり、ニューヨークやニュー・ジャーシーあたりを中心に活躍した。こういう人びと、進歩的な白人や若者、第三世界グループの人びとこそが、汚いアメリカの現実を知っている人たちである。逆にいうと、こういう人たちが、真に「きれいなアメリカ」を形成する人たちだといえる。

このように、今日のアメリカには「汚いアメリカ」を脱して「きれいなアメリカ」をつくりだそうとする機運があることは否定できない。ウォーターゲート事件の徹底的な追及であるとか、アグニュー副大統領の汚職による失脚ということが如実にそれを証明している。その後にある進歩的な白人グループは、かつての六八年の大統領選挙のさいにも、「平和と自由の党」というのを組織して活躍した人びとである。その時の大統領候補は、いまアルジェリアに亡命している元黒ヒョウ党のエルドリッジ・クリバーであった。こうした人びとが、今度にはベンジャミン・スポーク博士をかつぎ出したのである。これらの人びとこそが真の「草の根運動」のない手であり、真のアメリカの良識と良心のない手であるといえる。

汚い現実の打破をのぞむアメリカ人の期待のたかまりは、音楽の世界にも見受けられる。例えば、六八年ころよりヒットし、七〇年にグラミー賞を受け、六つの部門にわたって賞を独占し、年間六〇〇万枚のレコードの売上げを記録をつつたといわれるサイモンとガーファインクルの「明日に架ける橋 (A bridge over troubled water)」がある。かれらのヒット曲の中に明日のアメリカに期待をかけた曲が多いことは、注目にあたしい。かれらはまた六八年には映画「卒業」のテーマ曲である「スカポロー・フェア」をヒットさせ、「サウンド・オブ・サイレンス」とか「ミセス・ロビンソン」も有名である。「サウンド・オブ・サイレンス」は北欧のスウェーデンあたりで、人間疎外ととりくむためにYMCAが教材として使用している歌である。

その他に「アメリカ」という歌がある。これは、「アメリカを求めて (Look for America)」ということをやテーマとして六〇年代から七〇年代にかけての転換期のアメリカ人の夢を象徴していると考えられます。内容は、「わたしはアメリカを求めてやってきた。かれらはみなアメリカを求めてやってきた。全部アメリカを求めてやってきた」というもので、アメリカの新しい生まれ変わりへの期待が歌いこまれている。こうした風潮をニクソンは巧みに利用した。例えば、従来民主党を支持していた黒人歌手のサミー・デイビス・ジュニアを買収して、マイアミの共和党大会では若者のための大集会を開いたりした。日当を一〇〇ドルもだして若者たちを全国から狩り集めて若者向きの大集会を開いたといわれており、現地よりの実況テレビ放送でその盛況ぶりをみて驚かされた。

マクガバンの方は、「Come Home, America」と呼びかけた有名な演説をし、この題名を選挙のスローガンとした。これはサイモンとガーファインクルの「アメリカ」という歌に似かよっている。ニクソンの方もそれをうけて、「法と秩序」の強化によるアメリカの「常態への復帰」をスローガンとした。こうした両者の傾向はひじょうに似かよっていて、それをアメリカ国民一般がうまく皮肉っていたことを皆さんもおぼえておられるでしょう。七二年の選挙のさいに、マクガバンはジョージという名からセント・ジョージ(聖ジョージ)といわれ、そしてニクソンの方はリチャード王という坊主と国王といったシェクスピア劇まがいのジョージ的対決としてひやかしていた。ここにもアメリカ人のかれらへの積極的な期待よりも逆の失望が出ていたように思う。二人の対決の結果、マクガバンの道徳的アプローチに対して、現実主義に立つニクソンの勝利に終わったのが七二年の大統領選挙であった。はっきりしていることは、さきにも述べましたが、両者はいずれも進歩的な白人、若者たち、第三世界勢力によって支持されなかったということです。

「対抗文化」の台頭

はたしてこれらの反体制勢力の今後の活躍に「きれいなアメリカ」が実現する見とおしがあるかどうか。その一つの参考として、フランスの評論家のジャン・フランソワ・ルヴェルという人の『アメリカに始まる革命』（一九七〇年・タイム・ライフ・ブック）という本をあげておきたい。原名は「マルクスでもキリストでもなく」という変わった題である。マルクス主義によってもなく、キリスト教の影響とも無関係に、いまアメリカには現実に革命が進行しているという見方をしている。かれは、革命を五つに分けている。それは、政治、社会、科学技術、文化―価値観、最後に国際関係と人種関係の五つである。そして革命の条件として、一、不正に対する批判、二、管理あるいは効率主義への批判、三、政治権力への批判（とくにディンジョン・メーキングのあり方、市民参加の方法）四、文化の批判（宗教、信条、慣習、哲学、文学、芸術、イデオロギー）、五、文明の画一化、古い文明への批判、個人の創造性の解放とイニシアティブ）こういうものを革命の条件とみて、それらが何らかの形でアメリカにおいて進行中であるという点で、すでに革命が始まっているのではないかという問題提起をしているわけです。

こうした中で具体的に文化の批判とか、既成の文明の批判のない手として注目されるのが若者たちである。かれらは、いわゆる「対抗文化」という概念を提示している。これは反文化とも訳されるもので、英語では Counter Culture といわれている。この「対抗文化」の方向に、新しいアメリカ、きれいなアメリカという展望があるといえるように思う。これにかんしては日本でもかなり紹介されている。例えば、ダイヤモンド社から出ているヘイワードのカリフォルニア州立大助教授シオドア・ローザックの『対抗文化の思想』がある。副題は「若者は何を創りだすか」であるが、反逆的な姿勢の中に希望のあるアメリカを展望している。またチャールズ・ライクの『緑色革

命』は「長髪世代の意識構造」という副題がついており、早川書房から出版されている。さらにその続編ともいべきマイケル・ジェキアン編の『緑色世代』も早川書房から出版されている。また具体的に運動をしている若者の自己主張としては、いわゆるヒッピーからイッピーになって、この運動を指導しているジェリー・ルービンの『やっちまえ！ Do It!』（副題「革命のシナリオ」）（都市出版社）がある。かれの同僚のアビー・ホフマンの『イッピー！アメリカの「若者革命」宣言』（新書館）や変った題名の『この本を盗め』（都市出版社）などがある。『この本を盗め』はアメリカでは本当にその本が大量に本屋から盗まれてしまったという笑い話がある。こうした人たちの動きが現代の若者たちの最先端の動きを代表しているように思えるのです。かれらは、ヒッピーからイッピーへ、イッピーからジッピーへと変化し、さらにフリークへと変化した。ウッドストック・ジュネレーションといわれたのもかれらである。こうした若者たちは流動的で、たえず変化しつづけている。

若者たちの新しい傾向の代表者というか運動の指導者がアビー・ホフマンやジェリー・ルービンであったわけだが、注目していただきたいのは、かれらがひじょうに体制側からきらわれているということである。それほどにかれらが若者たち一般におよぼす感化が大なのだ。このことは、ニクソン政権がかれらにことあるごとに圧迫や弾圧を加えていることでもわかるであろう。たとえば六九年から七〇年春にかけての「シカゴ・エイト裁判」では、代表的な反戦運動の指導者八人が起訴され、ホフマンやルービンもそのメンバーであった。さらに黒ヒョウ党のボビー・シールもその一人であった。かれは七三年春のオーランド市長選では次点にまでもいった人で、黒ヒョウ党の全国委員長である。大西洋のコネチカット州のニュー・ヘイブンで起きた殺人事件に関連して、はるか西の太平洋岸に近いバークレーに住んでいるかれが呼び出されて、そこへいく途中にシカゴで途中下車させられて「シカゴ・エイト裁判」に連座させられた。結果的には無罪であっ

たけれども、裁判の最中に裁判長に向って、「ブタノ」とか「バカタレノ」とかいうことになって、裁判長権限による法延侮辱罪で合計四年の禁固刑をいわれたさたりした。事件そのものには全然関係ないわけですが。このような「シカゴ・エイト裁判」のニュースは日本にも報道されたのですが、サルグつわをはめられ、それでも駄目なのでグルグル巻きにして椅子にしばりつけられ、口には綿を押しこまれた上にテープをはられ、覆面をかぶせられ、それでもあばれるというので鉄の椅子を木に変えたりして、屈辱的・非人道的な処遇をうけて裁判された。

ホモ・LSD・マリファナ

新しい若者たちの登場は、他の面でもうかがえる。政治的な運動だけでなく、一見政治的でないような面にも変化があらわれている。たとえば、ホモ、LSD、マリファナなどが無関係ではない。ホモはいったいどうして問題になるのだろうか。アメリカではホモが法律的に禁止されていることがまず問題である。おそらく日本ではホモは問題とならないであろう。なぜなら日本ではホモは法律的に禁止されていないからである。日本では公然とできるわけだが、アメリカではだめなのです。しかも若者たちは「俺はホモだ」とわざわざホモ宣言をするわけです。そしてホモ同士の結婚式をあげたりしている。たしか聖公会あたりの一部のキリスト教の教会では、「ホモの結婚式をいたしません」と公言したりしている。これはフリー・セックス運動の一部でもあり、ホモの若者を軍隊がきらうから、反戦運動という性格ももっているわけだ。またマリファナのばあいでも、タバコ資本にたいする反対という色彩が強いといえる。こういう話をするとき皆さんにマリファナをすすめるような誤解をうけるおそれもあるが、じつはわたしも喫いました。アメリカの大学の学生仲間のパーティや反戦集会などでよくまわってきます。マリファナがタバコよりもすぐれている点は、習慣性がないということだ。そういう点ではタバコよりもはるかによい

ということが学者たちによって証明されているわけです。それなのに法的に禁止されているというのは矛盾している。人前で公然と喫うといったところには、同士のな罪意識の連帯とでもいうものもあるようである。喫うと緊張感がなくなり、ゆかになる点も利点だとされている。おそらくインディアン「平和のパイプ」はマリファナであったのではなからうか。

新しい若者の登場をさらに別の面から見ると、一九四五年以後に生まれた世代であるということですが。これもまた面白い現象であると思います。日本では昭和二〇年生まれの人はいま二八才ぐらいになるでしょう。アメリカでこの世代がとくに問題になるのは、じつはベンジヤミン・スポック博士の育児法で育てられた世代という意味があるからだ。一九四五年は、第二次大戦が終るとともに、スポック博士の育児の本が始めて発売された年でもある。Baby and child care という本がそれで、以来ずっとベストセラーをつづけ、これまでに二十万部も売られたとのことである。とにかく戦後にスポック式育児法によって育てられたのが、現代の若者であるわけです。この若者たちはいったいどの方向を向いているのかということが、今後のアメリカの方向を占うために役立つように思います。

ここがかんたんに若者たちのパターンの変化、世代的な変化を見えますと、一九五〇年以前の若者はボヘミアン型、一九五〇年代の若者は赤狩りのマッカーシー旋風のご真中であって、体制順応型というか静かな世代というパターンに属していた。それが一九六〇年代になると、がぜん変ってきて抵抗の世代、反逆の世代になってきた。一九七〇年代はどうかという二つの説がある。一つはキャンパスが静かになって学園紛争もなくなったという点から、五〇年代の静かな世代への回帰ということがいわれている。その反面で、何も信じないいわゆる不信の世代という傾向があるといわれる。いうなれば、現代の若者は、体制順応型と、対抗文化に生きがいを見いだす不信型、反逆の知性のもち主とに分裂する傾向がある。つまり、七〇年代の傾向は分

裂ということになるわけです。

キリスト教界もその例外ではなく、カトリックなどもはげしい分裂にみまわれている。カトリック左派には、ケイトンズビル事件やハリスバーグ事件の例のフリーリップ・ベリガン、ダニエル・ベリガンのような反戦・反体制の神父がいる。またニクソン大統領の宗教的背景がクエーカーであるのはおどろきだが、七二年のアイアミの共和党大会のさいにニクソンの宿舎にクエーカーの連中がいて、ニクソンをクエーカーから除名するという声明をだして問題になったこともありました。クエーカーは絶対平和主義で有名であるのに、ニクソンは例外であるようで、岡村昭彦氏によると、こういう人を「ファイティング・クエーカー（戦闘的クエーカー）」というそうです。

中東戦争をめぐる分裂

ユダヤ人が分裂していることにも注目していただきたい。ユダヤ人の中にキッシンジャーという出世頭があるのであるが、こういうことはアメリカの歴史中始まって以来である。アメリカで生まれていないドイツ生まれのキーン・ジンガーさんがついに国務長官にのしあがったわけです。ところが、キッシンジャーと対照的な人にだれがいるかというと、先に述べましたイッピールの元祖のジェリー・ルービンやアビー・ホフマンがいる。かれらははっきりと反体制側である。こういう人たちの分裂は何かというと、中東戦争の是非をめぐる分裂である。こんどの中東戦争をアメリカのユダヤ人全部がイスライルを支持しているかのようには伝えられているがじつはそうでない。それどころか、深刻な分裂がユダヤ人のあいだに起こっているわけです。これはかつての日本の原水禁運動の分裂に似ているところがある。すなわち、ジェリー・ルービンやアビー・ホフマンたちはあらゆる戦争に反対の姿勢をとっているが、他のユダヤ人たちはベトナム戦争やインドシナ戦争には反対であるが、中東戦争は俺たち祖国の戦争だから肯定せざるを

えないといった立場をとっている。ユダヤ系のアメリカ人の場合、生まれるとイスライルとアメリカの二重の国籍をもつわけです。ユダヤ系の人はすべてイスラエル国籍ももっているのです、召集令状もくるわけです。アメリカでは徴兵はなくなったが、イスラエル人にはくるわけです。こうしてユダヤ人の間にも深刻な分裂が進行しつつある。さらに中東戦争を契機にして、ユダヤ教ないしはユダヤ人的生活様式すら捨てるようなユダヤ人がでてきた。「非ユダヤ的ユダヤ人」とでもいうべきユダヤ人が出現しているのである。またユダヤ人分裂のもう一つの原因は、ソ連内のユダヤ人問題もからんでいる。参考までに申しますと、ニクソンもマクガバンも七二年の大統領選ではいずれもイスラエル支持を明らかに表明していた。

ユダヤ人同士のこうした分裂に加えて、大統領選をめぐる民主党内の分裂も深刻であった。例えば元テキサス知事で財務長官になったコナリーが、民主党員でありながら大統領選挙で「ニクソンを支持する民主党員」というグループを結成してニクソンの応援にかけつけた。また芸能人の中にも、従来、民主党系の芸能人がニクソン側についたりした。例えば、フランク・シナトラがそうだ。これにつづいてサミー・ディビス・ジュニアであるとか、映画の「オーシャンと11人」みたいな連中がぞろぞろとニクソン側についたわけです。フランク・シナトラにいわせると、きらいな奴がマクガバン派にいるというわけだ。だれかというところ、アンディ・ウィリアムであるとはつきりいつてはいないが暗に示唆していることは明らかである。アンディとボブ・ケネディ未亡人エセルとの関係からも推理できる。これらが分裂を意味する一つの象徴といえはいるであろう。

黒人間も分裂している。黒人は反ユダヤ傾向が強かったわけであるが、体制側のいわゆるブラック・キャピタリズム、黒人資本とでもいうべき政府から育成される黒人の資本主義に協力する側と、そうでない側に分裂する。さらにもっとも不幸なことは、従来ブラック・パワーカーの中心的存在であったブラック・パンサー（黒ヒョウ党）の分裂で

ある。武装闘争主義のエルドリッジ・クリーパー派（クリーパーはアルジェリアに亡命中）と、ボビー・シールやヒューイ・ニュートンあたりを中心とした穏健派との分裂である。

白人側でもスポック博士を大統領候補にかつぎあげて人民党をつくった人たちとそうでない人たちとの分裂・対立がある。選挙の統計では、人民党支持者はわずか一〇％程度にすぎなかったわけではあるが、存在していたことは事実だ。かつていわれたワズプ（WASP）、すなわち白人でアングロ・サクソン系でプロテスタントという人たちが権力をにぎる体制が崩壊していることは明らかである。七二年度の選挙でも、ニクソン対マクガバンの間にはいづれもアイリッシュ系という共通点があった。こうした事情からも、今回のウォーターゲート事件のような卑劣で汚い手段を使ってまでも再選を計ろうとしたニクソン側の原因がわかるように思います。

さらに背後には、産軍複合体といわれるものがある。具体的にアメリカの政治の汚さを追及していくとカリフォルニア州でもロサンゼルスを中心とする南カリフォルニアが政治的に非常に空気の悪いところであることがわかる。ロスは公害でも有名であるが、政治的にも汚れているところである。とくにオレンジ郡というディズニールランドのあるあたり（オレンジができるのでその地名がある）で、そこはたまちま石油の産地でもある。石油王といわれるヘンリー・サルバトリとニクソンとの結びつきは定評がある。事実こういう人びとに代表される石油資本とニクソン派との結びつきは非常に強いといえる。石油資本とアメリカの中南米の経済侵略とが密接な関係にあることは、最近よくいわれているとおりである。こうしたものに支えられているのがニクソンだといえるであろう。だからケネディとの対決に敗れたカリフォルニア州の知事選にでて惨敗したときに「もう二度とカリフォルニアには戻らない」と捨てぜりふをはいてニューヨークに去ったニクソンがなぜ大統領になると、ロスの南にあるサンクレメンテという小さな町に豪華な西のホワイトハウスをもつようになったかという理由も、南

カリフォルニアの保守・反動勢力との関係からはじめて説明しうるのである。

ニクソン政権の行くえ

アメリカの汚らしさは以上のようなようであるが、今後のアメリカはどうなるかということに若干ふれておきたいと思う。ニクソン政権はどこを軸に動くかという点、キッシンジャー中心、國務省中心で、今後とも積極的な国際政治をのりだすであろう。また、ありとあらゆる手段を使用してスキャンダル回避戦をとるであろう。最近のホワイトハウスの録音テープの問題にしても、ニクソンはあくまでも自分に不利な録音部分を消すなどして、大統領弾劾を回避しようとする必死の努力がうかがえる。その点では、皮肉なことに中東戦争が勃発したということは、ニクソンにとっては非常な「救いの神」であったことになろう。あるいはかれやキッシンジャーの画策であるかもしれぬ。第三には、「新多数派」というか「サイレント・マジョリティ」の虚構を強化しようとする工作をおこなうであろう。すなわち、世論操作に全力投球するであろう。キッシンジャー國務長官の出現にもその意味合いが非常に強いと思う。先程述べたように、大統領弾劾の回避にあらゆる手段を講じて全力投球するであろう。これは体制的危機の回避にもかからんでくるわけです。第四には、これらと関連して、新しい神話の創出に努力するであろう。評論家のスチュアート・オールソップあたりも、七二年にニクソンが再選された時に「再選後のニクソンはもはや政治家でない」といっている。とにかく、自分にかんじた神話をなんとかつくりだそうとしている。この目標としては一九七六年で、同年がちょうどアメリカの独立と建国の二百年目にあたるので、その時に大統領でいたいということ、またリンカーン以来の共和党の黄金時代の実現をめざすことなど、ともかく栄光の大統領として、有終の美を飾りたいという個人的な願望もあろう。そして、政策面では、経済問

題の重視、充米からいわれているドル危機、インフレ、失業問題等の克服をめざしている。

たしかにアメリカのインフレはひどい。そのことは、六月から八月にかけて物価を凍結したことや、プライム・レート（一流企業向け最優先貸出金利）を上げたことでもわかる。公定歩合は七回も引き上げられ、現在では七・五％というアメリカ史上最高の公定歩合になっている。こうすることによって今日のアメリカの体制危機を何とか打破しようとしているのがニクソンであるわけです。

ところで、日本との関係ですが、かんたんというと、貿易収支の巨大な不均衡の是正が第一であろう。また安保体制の重視からは当然に「相互主義」のパートナー・シップの確立を要求し、軍事費の負担を要求してくるであろう。さらには、沖繩の基地の維持について「日本全土の沖繩化」が現実化してくる。具体的には、空母ミッドウェイの入港にともなう横須賀の空母基地化ということにはつきりあらわれている。こうしたことからいえるニクソンの政策は、依然として力の政策というか対中・対ソの「三極バランス」だといえるであろう。それについて日本がいかに対応するかという対応の仕方が、われわれにとつては問題になるであろう。それよりもこれまではアメリカの汚さというところに重点をおいて話してきたが、これからは「汚い日本」ということがより問題になる可能性があると思う。

「きれいなアメリカ」が実現する希望をどういう面にもつことができるかという点、先程も述べましたが、進歩的な白人や若者たちの今後の動き、第三世界勢力といわれる非白人グループの今後の動きにもつことができるように思う。この中でとくに黒人のブラック・パンサー（黒ヒョウ党）を中心に見られる傾向は、新しいコミュニティ運動の展開という点で注目にあたいするように思う。それがいわゆる体制内改革といわれる方向であることは否定できないが、ブラック・パンサーあたりが方針を転換して、ボビー・シールがオークランドの市長選に立候補したりしたことに新しい傾向がうかがえる。それと同時に

行なわれたロサンゼルス市の選挙では黒人市長が実現している。オハイオのクリーブランドの市長も黒人である。それだけでなく、黒人差別の一番ひどい南部のジョージア州のアトランタの市長も黒人になったし、ミシシッピ州のファイエット市の市長も黒人になった。こうした動きがアメリカにできており、これらの動きを中心としてアメリカがきれいな方向に向かいつつあることが期待できるのではないだろうか。

太平洋岸においては、日系人の三、四世が動き出して、これまでは消極的であったかれらの活動も、しだいに活発化しつつある。サンフランシスコの南のサンノゼ市の市長は日系人である。ロスではかれらは雑誌『ギドラ』を出しているが、この「ギドラ」というのを僕は最初知らなかったのですが、どうやら東宝映画の怪獣映画に出てくる一番臆病な怪獣であるらしい。これは「イエロー・パワー」と関連して「イエロー」すなわち「黄色」を象徴している。アメリカの西部劇では「イエロー」とか「カワード」とか「イエロー・チキン」などといわれると決闘することになる。こうしたことを黄色人種に結びつけたわけです。そしてギドラという日本刀をさした小さい怪獣をもち出してアメリカ批判をしはじめたわけだ。かれらのスローガンは、「バナナになるな」ということである。みだりに白人の真似をすることなく、皮膚が黄色であることに誇りをもてということです。こうした動きが、三世、四世の代になって起ってきた。バナナというのは中が白くて外が黄色いところから「白人の真似をするな」というわけだ。かわらが一番いやな例として考えていたのは、日本でも有名なサンフランシスコの州立大学前総長のS・I・ハヤカワ氏で、いかにかれが体制的であるかを批判する言葉としてつくられたのである。こういうところからかれらが動き出していることに注目したい。

「パワー・トゥ・ザ・ピープル」

僕も第三世界グループの会合によく出席したが、そこで挨拶にでて

くるのは、こぶしをあげて挨拶するブラック・パンサー・スタイルの挨拶のうちに、「パワー・トゥ・ザ・ピープル」という叫びである。この「パワー」というのは、けっして暴力だというのではなく、「カウンター・パワー（対抗暴力）」とでもいうべきもので、体制や権力に對抗するための基盤となる生活に密着した土地であるとか、ホームであるとかをもパワーに含んでいる。それを現実に行こうとするところに新しいコミュニティ運動へのはげしい意欲が示されているように思う。

「パワー・トゥ・ザ・ピープル」は歌にもなっています。今日は歌の話が多いのですが、レノンと洋子の「パワー・トゥ・ザ・ピープル」というレコードがある。ついでにいっておきますと、これが日本にもってこられるとすぐ変えられてしまう。「パワー・トゥ・ザ・ピープル」ということばをきくと、僕なんか黒人のワァーとやるすさまじい意気込みや追力を感じる。ところが日本にもってくると「人びとに勇気を」なんて翻訳されてしまう。

これこそまさにナンセンスである。こういうところに、どうしても日本人が現実のアメリカを理解できない原因があるし、理解させようとしない勢力があることを知るべきであろう。そのような批判と反省の上に立ってはじめて、わが国に真のアメリカ研究が根をおろしうるのではないでしょうか。

桃山学院大学教授（日本近代史・アメリカ現代史）